

V＜調査結果のまとめ＞

1 学力調査結果について

(1) 小学校(小6)においては、大山町全体の平均正答率は、「国語」は全国よりやや高く、県より高い。「算数」は全国とほぼ同等で、県よりやや高い。「理科」は全国や県よりやや高い。「理科」はオンライン方式での実施だが、統計理論に基づき算出したIRT(項目応理論)スコアは487点であった。

「国語」では、昨年に引き続き、学習指導要領の内容「思考力、判断力、表現力等」の記述問題(書くこと)においては、正答率が高い結果となった。日頃の授業で書き方を具体的に提示し、考えたことや伝えたいことを書く活動をあらゆるタイミングで取り入れている成果であると考えられる。

「算数」では唯一正答率が低かった学習指導要領の内容「変化と関係」で課題が残る。特に10%増量したつめかえ用のハンドソープの容量が、増量前の何倍かを選ぶ設問において、半数以上の児童が0.1倍と誤答した結果である。意味の解釈を捉えていないのも要因の一部である。

「理科」では学習指導要領の内容「生命を柱とする領域」の正答率が高い。一方で「粒子を柱とする領域」においては、海にある氷がとけることについて、氷が水に変わる温度を根拠に予想して選ぶ設問に対し、50%の誤答があった。図や絵などを用いて表現したり、物のとけ方について考えたり、説明したりする活動の充実を図りたい。

(2) 中学校(中3)においては、大山町全体の平均正答率は、「国語」は全国や県よりやや高いが、「数学」は県よりやや高く、全国よりやや低い結果となった。

「国語」では、学習指導要領の内容「思考力、判断力、表現力等」の「書くこと」、「読むこと」においては正答率が高い。中でも自分の考えが伝わるように根拠を明確にして文章を書くことや、読み手の立場に立って表記を確かめて、文章を整えることができることはかなり高い。一方で資料や機器を用いて、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫する力が不足している。話し手の考えが正確に伝わり、聞き手の理解をより深めていくためにも、ICT機器を必要に応じて使用し、表現を工夫していく力を養いたい。

「数学」は、学習指導要領の内容「データの活用」が高く、不確定な事象の起こりやすさの傾向を捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明する力があることがわかる。逆に「関数」は低く、A駅から60.0km地点につくられる新しい駅の運賃がおよそ何円になるかを求める方法を説明する設問の正答率は31%であった。事象を数学的に解釈し、問題解決の方法を数学的に説明することには課題がみられた。何を明らかにしようとするのか目的意識をもたせ、事象をどのように捉え、数学の対象にするのかを明確にした上で数学的に表現する力を養いたい。

「理科」の「一酸化炭素は空気より軽い」という性質を基に適切な避難行動を選択する設問において、大山町の生徒は100%の正答率であった。また小腸の柔毛、肺の肺胞、根毛に共通する構造と同じ構造をもつものとして、適切な事象を判断し、選択する設問は、かなり高い結果であった。一方で電熱線を利用して水を温めるための電気回路についての設問や理科の実験で水道水ではなく精製水を使うのかという疑問を解決するための課題を記述する設問の正答率はかなり低かった。観察や実験の際は、

見通しをもって実験を計画させたり、根拠を示して表現させたりするなど、探究的な活動となるようにしたい。

(3) 学校間の平均正答率の差については、小学校では、国語 10%、算数 20%、理科 20%となり、中学校では、国語 4%、数学 8%の差となっている。

領域別にみると、小学校国語では、「我が国の言語文化に関する事項」の領域で 24.1%、算数の「測定」の領域で 30.1%、理科の「生命」を柱とする領域で 23.1%の差となっている。また、中学校国語の「言葉の特徴や使い方に関する事項」の領域で 28.7%、数学の「図形」の領域で 13.3%の差が生じている。理科の平均 IRT スコアで 16 ポイントの差となっている。

各学校が結果をしっかりと受け止め、分析し、日々の授業改善に取り組むとともに、国語は根拠を明確にして書くこと、算数・数学や理科においても数学的表現・理科的表現を使って説明したり、資料や ICT 機器を使って説明したりしていく力を養い、さらに小中学校の連携を強化し、学力向上を目指したい。

2 質問紙調査結果について

(1) 小学校においては、「自分にはよいところがあると思う」「先生がよいところを認めてくれる」「将来の夢や目標を持っている」と答えた児童が、対象児童が異なるものの昨年と比較して、肯定的回答の割合が高い結果となっている。これは学校教育の中で自己肯定感を育む取組の成果でもあると考える。一方で「困りごとなどについて先生や学校の大人に相談できる」と回答した児童は、57.9% (県 70.8%) であった。また「地域や社会をよくするために何かしてみたいか」の項目 82.5% (県 80.5%) で、昨年同様地域への愛着を育む「ふるさとキャリア教育」の推進の成果が出ている。

(2) 中学校においては、「先生がよいところを認めてくれる」は小学校同様、昨年と比較してかなり高くなっている。これも日頃から生徒にやる気を持たせる声掛けや働きかけを取り組んできた成果でもある。さらに肯定的回答の割合が高かったのは「数学の授業で、説明する活動を行っているか」の質問で、74.8% (県 63.4%) を占めていた。逆にかなり低かった質問は「ICT 機器を使って情報を整理することができるか」55.6% (県 67.1%)、「理科で学習したことは将来役に立つと思うか」35.7% (県 54.5%)、「自然の中や日常生活で、理解に関する疑問を持つことはあるか」38.1% (県 45.4%) の結果であった。

(3) 学習状況では、「授業の内容がよくわかる」と肯定的回答した児童生徒は小学校国語 82.5%、算数 82.5%、理科 85.1%で、中学校国語 83.8%、数学 66.7%、理科 69.7%であった。平日 1 時間以上勉強していると答えたのは、小学校 52.6% (県 56.9%)、中学校 46.5% (県 58.5%) で、休日 1 時間以上勉強していると答えたのは、小学校 47.3% (県 56.0%)、中学校 53.5% (県 59.2%) であった。これらの取組時間と各教科の平均正答率との関係も見てみると、小学校では平日休日とも 2 時間～3 時間の児童の正答率が一番高い。中学校では平日 1 時間～2 時間、休日は 2 時間～4 時間の生徒の正答率がかなり高い結果となっている。小中共通して「読書は好きですか」の質問で、肯定的回答をしている児童生徒の各教科の正答率が高く、しかも中学校においては平日 2 時間以上読書をしている生徒の各教科の正答率はかなり高い。